

情 報

目 次

1. 集会等の報告	59
1.1. 第 4 回 International SOLAS Summer School 参加報告	59
1.2. 第 3 回 EAS における Sato-umi Workshop 報告	60
2. 集会等のお知らせ	60
2.1. 第 13 回マリンバイオテクノロジー学会大会 開催	60

1. 集会等の報告

1.1. 第 4 回 International SOLAS Summer School 参加報告

会 期 2009 年 8 月 4 日 (火) ~ 8 月 14 日 (金)

場 所 フランス コルシカ島

参加者 欧米, オセアニア, アジア, アフリカの各地域から大学院生やポスドク研究員を中心に約 70 名の生徒と, SOLAS に関わる物理, 化学, 生物の各分野に渡る約 20 名の講師・スタッフ

この度, 科学研究費補助金特定領域研究「海洋表層・大気下層間の物質循環リンケージ (W-PASS: Western Pacific Air-Sea Exchange Study)」事務局より渡航費用援助をいただき, 2009 SOLAS (Surface Ocean and Lower Atmospheric Study) Summer School (以下 SOLAS SS) に参加した。SOLAS とは, 海洋表層と大気下層の物質相互作用を解明するため 2004 年に立ち上がった地球圏-生物圏国際協力計画 (IGBP) 第 2 期の国際コアプロジェクトである。スケジュールは講義, 実習, 生徒たちによるポスターおよび口頭発表によって構成され, 眼下に地中海を臨む絶好のロケーションで約 2 週間, SOLAS 漬けの充実した日々を過ごすことができた。

講義は科学的なものはもちろんだが, 特に興味深かったのは研究を進めたり論文発表したりする際の道徳に関する講義であった。事前に配布されたアンケート結果に基づいて講義が行われ, 論文内でのデータの扱い方や共著者に対するマ

ナー等が具体的な例を示しながら解説され, 時には討論にまで発展することがあった。おそらく日本の大学院でこのような講義は稀ではないかと思うので, 今後は是非取り入れて欲しいと感じた。

実習は観測航海, 海水試料分析 (クロロフィル, 塩分, 栄養塩), モデリング, 大気中微量ガス分析, ガス交換の 5 つから 4 つを選んで, それぞれ半日ずつのスケジュールで行った。半日という短い時間ではあったが, 普段関わることのないテーマに, 実際手を動かしながら取り組める機会はなかなかない。また, 発表の仕方に関する実習では, 実際に自分たちのポスターやスライドを使って, 科学的なことではなく, 色使いや文字の配置, 立ち方や喋り方などの技術的なことに焦点を当て, 各々にアドバイスが与えられ非常に有意義であった。

参加者は予め, 研究発表ポスターと 1 分間および 5 分間の口頭発表原稿を準備する必要があった。筆者は, 博士課程時の研究成果の一つである大気海洋同時観測で捉えた黄砂イベントにおけるダストフラックスに関する研究をポスター発表で紹介した。ポスター発表は 3 日間に渡り, 授業終了後の夕方から空がすっかり暗くなる 21 時頃まで, 連日屋外で行われた。ダスト (鉄) と海洋一次生産の関わりは, SOLAS の中でも関心の高い分野で, 発表件数も少なくなかったが, 発表内容はダストとバイオエアロゾル (細菌) との関係, 火山灰降下と一次生産の増加, 雲過程で生成される微小鉄粒子などアプローチが多岐に渡り, 今後のダスト研究の行方が非常に楽しみに感じた。一方, 口頭発表では, 4 月から新しく始めた海洋起源有機エアロゾルの雲核活性に関する研究を紹介した。ダスト研究者に比べるとずっと少数派だったが, 同じゴールを目指す研究者と知り合うことができ, お互い情報不足で頭を悩ましていたこともあったので大変心強く感じた。

今回の SOLAS SS では, 地理的な要因も大きいだろうが, 欧米圏からの参加者が圧倒的に多く, 西部北太平洋を主なフィールドする国からの参加者はごく少数であった。西部北太平洋はアジア大陸や島嶼部からの陸起源物質の輸送や台風の通過など様々な大気圏の突発的な現象とそれらに対する生物化学的応答を捉えることのできる非常にユニークな海域であるので, 今後の SOLAS SS ではより多くの周辺諸国の大

大学院生、ポスドク研究員に参加してもらいたい。

SOLAS という共通点以外は国籍も研究内容も異なる多くの研究者と触れ合えたことは大きな刺激であり、筆者の今後の研究生活において今回の経験は確実に糧となるだろう。最後になりましたが、SOLAS SS への参加を助成して下さった W-PASS 事務局に対して謝意を申し上げます。

岩本 洋子 (名大高等研究院)

1.2. 第3回 EAS における Sato-umi Workshop 報告

日時 2009年11月23日(月)~26日(木)

場所 マニラのフィリピン国際会議センター

主催 PEMSEA (Partnerships in Environmental Management for the Seas of East Asia) とフィリピン政府の共催

出席者 20か国から科学者、政策決定者、NGO、漁民ら約1500名

この会議は2003年プトラジャヤ(マレーシア)、2006年ハイコク(中国海南島)に続くものである。4日間の会議中にICM(Integrated Coastal zone Management)に関する34のセッションが行われたが、そのひとつとして、11月24日(火)に1日かけてSato-umi Workshopが行われた。Sato-umiの国際Workshopが開催されるのは2008年10月の上海(柳, 海の研究18(1), p72, 2009)に続く2回目である。

11月23日EASの開会式では日本の片山敬一氏((株)海洋建設)の日本語による基調講演(スクリーン上で英語字幕による同時通訳が行われた)「漁師としての潜水経験をもとに、カキ筏やカキ礁付近では多様な小動物や魚が存在しているという知識を元に、20年かけてシェルナースという新たな漁礁を開発した。カキ養殖の漁閑期に地元の漁師を雇用し、余ったカキ殻を使ってこの漁礁を組み立て、彼らに就業機会を与えると共に、出来た漁礁を付近の海に投入することで、沿岸海域の生物多様性を高め、結果的に漁獲量を増加させて、持続可能な漁村作りに成果を上げている」が、会議参加者に感銘を与えた。

10か国から約70名が参加した、PEMSEAと国際EMECS(Environmental Management of Enclosed Coastal Seas)センターの共催によるSato-umiセッション(議長:松田治氏(瀬戸内海研究会議)、副議長:柳, Ann McDonald氏(国連大学))では、午前中、柳がSato-umiの定義と欧米と日本でのMPA(Marine Protected Area)の違いに関する説明をした後、七尾湾・山口湾・英虞湾・東京湾・播磨灘

の里海創生運動、日本の環境省による里海創生運度支援政策の紹介が行われた。午後は、タイから「アンダマン海の津波被害復興活動」³⁾、市民を巻き込んだサンゴ礁復元運動⁴⁾、インドネシアから「バリ島の人々の信仰に根ざした農業資源保護活動」⁵⁾、ベトナムから「市民によるマングローブ林復活運動」⁶⁾、マレーシアから「漁礁の効果評価」⁷⁾、韓国から「南西海岸の干潟保全活動」⁸⁾、フィリピンから「南部でのICM失敗例とその原因」⁹⁾、放棄されたエビ池をマングローブ林に復活する活動計画¹⁰⁾、漁民の経験知に基づいた水産資源保全活動¹¹⁾、の紹介があった。最後にパネルディスカッションが行われ、「人工的に魚介類の棲息場所を新たに作ることで沿岸海域の生物多様性を上げることは可能であり、適切な漁獲管理を行って、生物多様性の余剰物として魚介類を漁獲することで持続可能な沿岸漁業は可能である。しかし、魚介類の棲息場所創生は適切な水質の元でないとは不可能である。適切な水質を確保するためには、山・里・川・海・の環境統合管理(生態系管理)が必要であり、それぞれの場所で、環境にやさしい林業者・農業者・漁業者が生活していることが重要である。したがって、里海創生を含むICMの成功は山・里・海での健全な1次産業の養成にかかっている。さらに、里海創生には自然科学のみならず、自然と人間の心の関わりの在り方を明らかにする社会・人文科学者の参加が不可欠である」という結論を得た。

第3回Sato-umi国際Workshopは2010年10月、生物多様性に関するCOP10が開催される名古屋で開かれる予定である。

(柳 哲雄, 九大応力研)

2. 集会等のお知らせ

2.1. 第13回マリンバイオテクノロジー学会大会開催

大会日程 2010年5月29日(土)~30日(日)

会場 広島大学 東広島キャンパス 生物生産学部C棟

大会役員 大会会長 堀 貫治 (広大院生物圏)

実行委員長 長沼 毅 (広大院生物圏)

大会事務局 〒739-8528 広島県東広島市鏡山1-4-4

広島大学大学院生物圏科学研究科内

第13回マリンバイオテクノロジー学会大会実行委員会

tel: 082-424-7986; fax: 082-424-7916

e-mail: takn@hiroshima-u.ac.jp

懇親会 開催日 5月29日(土) 18:00~20:00

場所 検討中(会場手配済)

大会の内容

1. 一般講演 (口頭発表, ポスター発表)
2. シンポジウム (一般)
3. 懇親会

* シンポジウムの企画を公募致します。シンポジウムの企画をご希望の方は大会事務局までご連絡下さい。

発表形式

1. 口頭発表: 一般講演は質疑含み 15 分 液晶プロジェクター使用
2. ポスター発表: 学生を対象とした優秀ポスターの表彰を予定

一般講演のセッション

1. 微生物
2. 微細藻
3. 海藻・付着生物
4. 魚介類
5. 天然物化学・未利用資源
6. バイオミネラルセッション
7. マリンゲノム
8. 環境・環境適応
9. その他

発表申込みの締め切り 2010 年 3 月 12 日 (金) 必着

講演要旨の締め切り 2010 年 3 月 31 日 (水) 必着

事前参加登録締め切り 2010 年 4 月 30 日 (金) 必着

事前参加登録費

会員 5,000 円 学生 2,000 円 非会員 9,000 円

非会員学生 4,000 円

当日参加費

会員 7,000 円 学生 3,000 円 非会員 10,000 円

非会員学生 5,000 円

* 協賛いただきました団体の会員の方は、当学会会員と同等の参加費で参加できます。

講演申し込み方法

発表希望者は書式に従って、発表希望セッション、希望発表形式、発表者氏名・所属略記 (連名の方全員)、演題を明記の上 web 上よりお申し込み下さい。

参加登録方法

参加登録希望者は書式に従って、申込者氏名・所属および連絡先を明記の上、web 上よりお申し込み下さい。詳細は大会ホームページでご確認下さい。

第 13 回大会ホームページアドレス: 準備中

学会ホームページ:

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsmb/>